

広島経済大学経済学会

2000年度 第7回研究集会報告要旨〔2001年1月25日（木）〕

環境問題と環境教育

藤 谷 健*

今日では、政治経済をはじめ鉱工業、農業などの生産活動から、交通、福祉、医療、家庭生活、更には軍事に至るまで、社会のあらゆる活動分野が環境問題を無視しては成り立たなくなっている。一方、環境に対する市民の意識は、市民自身が受けた教育によって大きく影響される。そこで今回の報告では、日本社会の近代化の中で問題となった環境問題を振り返るとともに、環境問題が学校教育の中でどのように扱われてきたかを追跡し、更に次の世代を担う現在の大学生の環境観について調査した結果を報告する。

1. 日本では過去にどのような環境問題が存在したか

日本における環境問題は、江戸時代から湯屋、鍛冶屋、造り酒屋などの煙害、都市のし尿問題などがあったが、発生源ひとつひとつの規模が小さかったり、都市のし尿のように農村還元というリサイクルの道が開かれていたことなどのため、それらが環境問題として顕在化したのは、明治の近代化政策による重工業や近代的鉱業の発展に伴ってであった。その代表例が大阪の煙害や、別子、日立、足尾などの銅鉱山から発生する二酸化硫黄による大気汚染や、鉱滓の流出による渡良瀬川の重金属汚染であった。

第二次世界大戦後には、水俣病をはじめとする四大公害裁判に見られるように、特に高度経済成長期に多くの環境問題が発生した。そしてこれらはいずれも十分な被害防止措置をとらなかった企業側に問題があったことが明らかになった。つまり「産業公害」であった。ところがそのころから市民生活自体が環境汚染の原因になるようになってきた。たとえば都市における自動車排気ガスの問題、家庭排水による河川の汚濁などがその例である。また、1977年に確認されたごみの焼却に伴うダイオキシンの発生など、かつての「公害」という概念では捉えきれない環境問題が発生している。更に、フロンによるオゾン層の破壊や、二酸化炭素の増加による地

* 広島経済大学経済学部教授

球温暖化問題など、地球規模で考えなければならない環境問題が出てきたため、近年では「環境への負荷」という見方をしなければならなくなっている。

2. 学校教育の中で環境はどのように扱われてきたか

これに対し日本の学校教育がどのように対応したかを見ると、第二次世界大戦前は環境という意識はまったく見られず、都市の煤煙も国家繁栄の姿として捉えられていた。(小学国語読本尋常科用巻七)

戦後も長い間環境問題は学校教育では取り上げられなかったが、公害学習がはじめて学習指導要領で取り上げられたのは昭和45年で、それは社会科においてであった。ところが環境問題を科学的に取り扱うべき教科である理科ではその後も長らく放置され、不十分ながら環境の科学が理科で扱われるようになったのは最近のことである。

3. 現代の若者は環境問題をどのように捉えているか

このことを調べるにあたって、広島経済大学の平成12年度入学生を対象として、アンケート調査を行った。その結果、

- ①高等学校における環境教育は主に社会科で行われているが、それも不満足なものであること。
- ②彼らが強い関心を持っている環境問題は、地球温暖化やフロンによるオゾン層の破壊のような地球環境問題で、地域環境問題のうちで関心が強いのは、ごみ処理の問題であること。
- ③ng, pg といった汚染物の量の単位をほとんど知らないこと。
- ④ダイオキシンや環境ホルモンなど、最近特に問題となってきた汚染物については、その科学的知識が極めて乏しいこと。
- ⑤にもかかわらず、環境問題に対する若者の倫理観は健在であること。

などが分かった。

4. 学校教育における環境教育教材の開発例

本報告では最後に、演者等が行った環境教育教材開発の実例を示した。

ここに示されたのは、生活排水浄化のモデル実験としての、活性汚泥によるデンプンの分解である。この実験は自然浄化のモデルであるとともに、都市下水がどのような原理に基づいて処理されているのかを、簡単なガラス実験器具と鑑賞魚用のエアポンプだけで示すものである。